

シンガポール（1989年）

バングラデシュを訪問するとき、シンガポールに立ち寄り、数日間滞在した。海上交通の要所であるここには、船を修理するドックがあり、日本企業が進出していた。チッタゴン造船所のリハビリ調査に関連して、シンガポールの船舶修理事情を調べるのが訪問の目的であった。



ジュロン工業地区

セントーサ島

チャンギ国際空港からホテルに向かう町並みは美しく、高層ビルが建ち並ぶ。これまで行った東南アジアの国とは違った趣で、先進国のイメージである。

シンガポールはごみのポイ捨てや道路に唾を吐くと罰金が課せられるという文明国だが、未だに鞭打ちという非文明的な処刑制度が残る。麻薬の使用は鞭打ち刑、密輸をすると死刑という恐ろしい国である。



1 カエルとエビ

情報収集のため、ジュロン工業地区にあるジュロン造船所と日立ロビン造船所を訪問した。

カエルの天ぷら

ジュロン造船所ではシンガポール人が迎えてくれた。工場を見学した後、シンガポール料理屋へ案内された。猿、へび、こうもり、カエルなど何でもありの店である。メニューを示し好きな物を注文してくださいというが、ゲテモノは遠慮し、勧められるままカエルの天ぷらをお願いした。初めて口にするカエルは少し生臭いが、味はニワトリと変わらなかった。



日立ロビン造船所を案内してくれたのは、大阪の堺工場から出向してきた工場長だった。大阪弁丸出しの説明が懐かしく、関西弁でやりとりしながら工場を見学した。彼は工場の敷地を利用して、ビニール製の大きな水槽でエビの養殖に取り組んでいた。水の管理に失敗し、稚魚が全滅した話など、船の話よりエビのほうに熱を込めて語っていた工場長の姿を思い出す。

2 かき

海鮮料理で有名な展望レストランへ行った。シンガポールの町並みやマラッカ海峡に浮かぶ数十隻の船が眼下に見える。バイキングスタイルのレストランで伊勢エビなどテーブルには新鮮な海の幸が並んでいる。レモンを添えた殻付きの大きな牡蠣が皿に盛られ、私を待っている。常夏の国、しかも今は8月、この牡蠣は大丈夫だろうか。日本で生ガキにあたった苦しさが頭をよぎる。ここは先進国の一流レストランだから大丈夫だろうと、誘惑に負けた私はレモンを搾って口にする。うまい！ とろけるような味である。お代わりの皿を持ってテーブルを往復した。

停泊中の船（ぼやけてゴメン）



3 ニュートンサーカス

宿泊したホテルの名前は忘れたが、立派なホテルだった。一流ホテルのレストランは値段も一流なので、海外での食事はいつも経済的なダウンタウンに行くことにしている。ガイドブックを頼りに、安くて美味しい屋台が並ぶオーチャードロード沿いのニュートンサーカスへ行った。どの屋台も観光客やローカルの人で賑わっている。エビやチキンなど、好きな物を好きなだけ皿に盛り、ビールを取って、お金を払う。ほろ酔い気分の中、シンガポールの夜は更けゆく。

4 セントーサ島

本島とロープウエーで結ばれた観光地、セントーサ島へ行くことにした。海峡を渡るロープウエーの乗り場で待っていると、インドネシアの方から黒雲が迫ってきた。見る間にスコールが降り始めた。ロープウエーからは雨に煙るシンガポールの街がそこにあるようだ。島に着く頃にはスコールも止み、水族館で熱帯の魚を鑑賞した後、島内を一周するモノレールに乗り込んだ。箱庭のような美しいゴルフ場で楽しそうにプレーしている人たちが見える。今度、シンガポールに来るときは、是非ここでプレーをと心に誓った。



船で本島に帰り、シンガポールのシンボル、マーライオンの像を見て、バン格拉デシュへと向かった。

